

## 故郷

魯迅

嚴寒の中、二千里あまり離れた故郷に二十数年ぶりに帰った。

季節は真冬である。故郷に近づくとつれて空はくもり、寒風がひゅーひゅーと船室に吹き込んできた。篷の隙間から外を望むと、くすんだ空の下、遠く寂れた寒村が活気なく横たわっている。知らず、寂寥の念が胸に湧き上がってきた。

ああ、これが二十年来忘れることのなかった故郷なのだろうか。

わたしの覚えている故郷はこうではなかった。わたしの故郷はもっと良かった。ただ、わたしがその美しさを思い起こし、その良いところを語ろうとしても、映像は消え、言葉にならない。こんなものだったのだろうか。

本編は当初一九二二年五月の「新青年」第九卷第一号に発表された。

そして、わたしは自分にこう言い聞かせる。故郷はもともとこのようなところなのだ。進歩はないが、わたしが感じるような寂寥があるわけでもない。ただ、わたし自身の気持ちが変わっただけなのだ。今回の帰郷は、もともと楽しいものではないのだから。

今回は、故郷に別れを告げに来たのだ。わたしたち一族が長年暮らしてきた古い屋敷は、すでに人の手に渡っていて、明け渡しの期日が今年限りとなっていた。そのため、元旦までに帰ってきて、慣れ親しんだ古い屋敷に別れを告げ、この故郷を遠く離れて、わたしが暮らしている他郷に越さなければならなかった。

次の日の朝、我が家の戸口に着いた。屋根の枯れ草が風に揺れ、あるじはこの屋敷を手放すほかなかったのだ、と語っているようであった。一族の者はあらかた引越しを済ませたのだろう。とても静かだった。わたしが自宅の前に着くと、母が迎えに出ていて、あとから八歳になる甥の宏児ホンルが飛び出してきた。

母は喜んだが、寂しげな様子も見て取れた。わたしを座らせ、休ませ、茶を飲ませているのだが、引越しのことには触れないのである。宏児はわたしと会ったことがないので、遠くからこちらを見るばかりである。

だが、ついにわたしたちは引越しのことを話した。わたしは、向こうでの住まいは借りてあること、家具もいくつか購入していること、家の中の道具を売り払ってから買い足す必要があることを話した。母もそうだねと答え、荷物はあらかたまとめてあり、かさばる道具も半分は売り払ったがいくらにもならなかった、と言った。

「二、三日休んで親戚に暇乞いしたら発つことにしようか」と母は言った。

「そうだね」

「それから閩土ミントウが、うちに来るたびにおまえのことを尋ねてね。ずいぶん会いたがっていたよ。帰ってくる大まかな日取りは言っている

から、そろそろ来るかもしれないね」

このとき、わたしの脳裏に突然不思議な光景が浮かんだ。紺碧の空には金色の丸い月が掛かり、その下の海辺の砂地には見渡す限り緑の西瓜が植えられている。十二、三歳の少年がいて、首に銀の輪をつけ、手には鉄の刺叉を持っている。一匹の獠チャに向かつて力一杯突き出すが、獠は身を翻して少年の股の下から逃げてしまう。

この少年が閩土である。彼と知り合ったとき、わたしも十を過ぎたくらいだった。今から三十年も前のことだ。当時は父がまだ生きていて、暮らし向きも良く、わたしはまったくのお坊ちゃんだった。その年、我が家は大きな祭祀の当番になっていた。この祭祀は、三十年に一度しか回って来ず、たいへん念入りなものだった。正月に先祖

獠・魯迅は一九二九年五月四日、舒新城氏に宛てた手紙の中で、「『獠』の字は、郷里の人間が話す音をもとに、わたしが作ったもので、『查』のように読みます。……今にして思えば、穴熊だったのかも知れませんが」としている。

大きな祭祀の当番・封建社会の大家族では、毎年祖先を祭る催しが行われ、費用は一族の「祭産」の収入から捻出していた。各世帯が年ごとに持ち回りで取り仕切り、当番の世帯は「値年」と呼ばれた。

の像に供え物をするのだが、供え物が多く、祭器は凝っていて、訪れる人も多いため、祭器の盗難を防ぐ必要があった。うちには忙月マンユエが一人しかいず（郷里では手伝いをする人を三つに分けていた。年間を通じて決まった家のために働く者を長工チャンコウと呼び、日決めで手伝いをする者を短工トウコウと呼んだ。自分も畑を持ち、年越しや祭り、収穫のときだけ決まった家の手伝いをする者は忙月と呼ばれていた）、手が足りないため、彼は息子の閨土に祭器の番をさせたい、と父に申し出た。

父がそれを許したので、わたしもたいへん喜んだ。以前から閨土という名前は聞いていて、彼がわたしと同じ年頃であること、閨月の生まれで五行の土が欠けていたため、彼の父が彼を閨土と呼んでいること、彼がわなを仕掛けて小鳥を捕まえることを知っていたからである。五行の土が欠けている：旧社会で「八字」を算するなどと言っていた迷信である。つまり、天干（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）と地支（子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥）を組み合わせて、生まれた年、月、日、時を記録するもので、それぞれに二字を充て、あわせて「八字」とする。それらは五行（金、木、水、火、土）にそれぞれ属すと考えられ、甲乙寅卯は木に、丙丁巳午は火に属すなどとした。八つの字が五者を含んでいれば、五行俱全となる。「五行の土が欠けている」とは、この八つの字に土に属する字がないということであり、土や土を偏旁とする字を名前に付けるなどして補う必要があった。

る。

わたしは指折り数えて新年を待った。新年になれば、閨土もやって来るのだ。年末になったある日のこと、母が「閨土が来たよ」と知らせてくれた。わたしは駆け出して見に行った。彼は台所にいた。よく日焼けした丸顔で、頭に小さな毛氈もっせんの帽子を載せ、首にはきらきらと輝く銀の輪をつけていた。父親がどれだけ彼を大事にしているかよく分かった。彼が死なないように神仏に願を掛け、輪で彼をつなぎ止めているのだ。彼は人見知りだったが、わたしとは打ち解け、そばに人がいないときは話をしたので、半日もしないで親しくなった。

あのとき、わたしたちが何を話したのか分からないが、閨土がはしやいでいたことだけは覚えている。街へ出かけて、見たことのない物をたくさん見てきたのだと言つ。

次の日、わたしは彼に鳥を捕まえてくれるように頼んだ。彼は言った。

「それはできないよ。大雪が降らないとだめなんだ。砂地に雪が降ったら掃いて空地を作つてね、短い棒で大きな竹かごを支えて、その下に糶しほをまいておくんだ。鳥が食べに来たら、棒にくくりつけたひもを遠くから引つ張つて、竹かごの中に鳥を閉じこめるんだよ。なんだっているよ。稲鶏だろ、角鶏だろ、鳩に藍背……」

わたしは雪が降るのが待ち遠しかった。

閨士はこんな話もした。

「今は寒いけど、夏になったらうちにおいでよ。昼間は海辺に貝殻クイチェアを拾いに行くんだ。赤い貝とか緑の貝とかいろいろあるんだ。鬼見怕クニミヤコもあるし、観音手カンオンテもあるよ。夜は、ぼくと父さんと西瓜の番に行くんだ。一緒に行こう」

鬼見怕と観音手はいずれも小さな貝殻の名称である。旧時、浙江沿海の人は、こつした小さな貝殻に糸を通してつなぎ、子ども腕や足首につけることで魔除けになると考えた。こつした名称の多くも魔除けの意味で付けられている。

「泥棒を見張るの？」

「ううん。通りすがりの人がのどが渇いて西瓜を食べても、ぼくらのあたりじゃ盗んだと言わない。見張らないといけないのは穴熊や針鼠イヌリスだよ。月の下で耳を澄ますと、ピチャピチャって音が聞こえる。獐シカが西瓜をかじっているんだ。刺叉シヤを持って、そつと近づくと……」

当時、わたしはこの獐シカと言つのがどついうものか知らなかったが（今でも知らないが）、なんとなく小さい犬のような姿をした獐シカな動物なのだろうと思つた。

「そいつは人を噛まないのかい」

「刺叉シヤがあるさ。近づいて獐シカを見つけたら、すぐに突くんのだ。あいつは利口だから、逆にこつちに走つて来て股の下をくぐって行くよ。あいつの毛皮は油みたいに滑るんだ……」

世の中にこれほど多くの珍しいことがあるとは、わたしはまったく

知らなかった。海辺に色とりどりの貝殻があること、西瓜にこのような危険ないわれがあったこと、わたしはそれまで果物屋で売られている西瓜しか知らなかった。

「大潮の時期になると、砂地では跳鯊とびほがたくさん跳ねるんだ。蛙みたいに足が二本あるんだよ……」

ああ、閨土の心には不思議な出来事が無限に詰まっていて、わたしの友人たちが知らないことばかりだった。友人たちは何も知らなかった。閨土が海辺にいるとき、彼らはわたしと同じように庭の壁越しの四角い空を見ていたのだ。

だが、正月が過ぎると閨土は家に帰らなくてはならなかった。わたしはじれて大泣きした。彼も台所に隠れ、泣いて帰るのを拒んだが、結局父親に連れられて行った。彼はその後、父親にことづけて貝殻をひと包みときれいな鳥の羽を何本か送ってくれた。わたしも一、二度何かを送ったが、それ以来会うことはなかった。

母が彼のことを口にした瞬間、この子どものころの記憶が稲妻のようによみがえり、美しい故郷を見たような思いがした。わたしは答えで言った。

「それはいいね。彼は、どうしているかな？……」

「閨土かい。……あちらも暮らし向きは良くないみたいだね……」  
母はそう言いながら部屋の外に目をやった。「あの人たち、また来るよ。道具を買うとか言うのだけれど、勝手に持って行ってしまっんだ。ちょっと見てくるよ」

母は立ち上がって出て行った。外では数人の女性の声がする。わたしは宏児をそばに呼び、字は書けるのか、でかけるのは楽しみかと尋ね、おしゃべりをした。

「列車に乗って行くの？」

「列車に乗って行くよ」

「船は？」

「まず船に乗って……」

「あらまあ、こんなになって！こんなにひげを生やして！」突然、甲高い大声が響いた。

驚いて顔を上げると、頬骨が飛び出した、唇の薄い五十歳前後の女性がわたしの前に立っていた。両手を腰に当て、はかまも着けずに仁王立ちしている。製図道具にある脚の細いコンパスのようだった。

わたしは固まってしまった。

「分からないのかい。抱っこしてやったものだけどねえ」

わたしはますます混乱した。幸い母も入ってきて、傍らからこう言った。

「うちを出て何年にもなるから、忘れてしまったのよ。覚えてはただけどね」とわたしに向かって言った。「はす向かいの楊二嫂だよ……豆腐屋をやっていた」

ああ、思い出した。わたしが子どものころ、はす向かいの豆腐屋に日がな座っていたのが楊二嫂で「豆腐小町」と呼ばれていた。ただ、おしろいを塗っていたし、頬骨はこんなに高くなく、唇もこれほど薄くはなかった。おまけに終日座っていたので、こんなコンパスのような姿勢はこれまで見たことがなかったのだ。当時は、彼女のおかげで豆腐屋の商いはたいへん順調だという話だった。ただ、年齢のせいだと思うが、わたしには何も感じるころがなかったため、完全に忘れてしまっていた。これがコンパスには不満だったようで、軽蔑のまなざしを浮かべると、フランス人のくせにナポレオンを知らず、アメ

西施（訳注：訳文では「小町」としたが原文は「西施」である）：春秋時代・越国の美女で、後に美女の総称として用いられた。

ナポレオン（1769～1821）ナポレオン・ボナパルトを指す。フランスの資産階級革命期の軍人であり、政治家である。一七九九年に共和国執政に就任した。一八〇四年にフランス第一帝政を打ち立

リカ人のくせにワシントン を知らないことを笑うかのように言った。

「 忘れた？ まったくお偉い人は目が利くねえ……」

「 そんなことはないですよ……わたしは……」 わたしはあわてて立ち上がった。言った。

「 それじゃ、言わせてもらいますけどね。 迅ちゃん、あなたは裕福になったんだし、運ぶにも重いものだから、あのがらくたはわたしに寄越してしまいなさいよ。 わたしたち貧乏人には役に立つのだから」

「 裕福ではありませんよ。 これを売って、それで……」

「 あらあらあら、道台 のお役目を蹴つておいて裕福じゃないだつ

て、ナポレオン一世を僭称した。

ワシントン（1732～1799）（ジョージ・ワシントンのことであり、アメリカの政治家である。一七七五年から一七八三年にかけてイギリスの植民統治に反対するアメリカの独立戦争を率い、それに勝利した後、アメリカの初代大統領に就任した。）

て？ お妾を三人囲って、出かけるときは八人担ぎの駕籠に乗っているのに裕福じゃない？ はっ、知らないとも思っているのかい」

話のしようがなく、わたしは口を閉じ、黙って立っていた。

「 ああ、まったく金持ちになればなるほど出し渋るものだねえ。 出し渋って、また貯め込んで……」 コンパスは腹立たしげに背を向けると、ぶつぶつ言いながらゆっくりと外に向かい、行きがけに母の手袋をズボンの腰に押し込むと、出て行った。

その後は、近くの一族や親戚が訪ねてきた。 対応をしながら、ひまを見ては荷物を片付け、そうこうしている内に三、四日が過ぎた。

冷え込んだある日の午後、わたしは昼食を済ませ、座って茶を飲ん

道台：清朝の官職である道員の俗称。 ある区域の行政職を総括する道員と特定の職務を担当する道員に分けられる。 前者は省以下、府州以上の行政長官であり、後者は一省における特定の事務、例えば督糧道、兵備道などを担当した。 辛亥革命後、北洋軍閥政府もこの制度を援用し、道尹と改称した。

でいた。外から人が入って来た気配がして、振り向いた。瞬間、わたしはあわてて身を起こし、迎えに出た。

やって来たのは閩土だった。一目で閩土だと分かったが、記憶の中の閩土とは違っていた。身の丈は倍になり、あの日焼けした丸顔は黄ばみ、深いしわが刻み込まれていた。目も彼の父親と同様、まわりが赤く腫れていた。海辺で耕作をしている者は、終日海風に吹かれるためこうなるのだと聞いたことがある。頭には破れた毛氈の帽子、身には薄い綿入れだけを着ていて、ぶるぶると震えている。手には紙包みと長い煙管を提げていたが、その手もわたし知っている血色の良い、ふっくらとした手ではなく、太くて大きい上にひび割れていて、松の樹皮のようだった。

このとき、わたしはとても興奮していたが、なんと話して良いか分からず、ただこう言った。

「ああっ！閩土、来てくれたんだね……」

話したいことが数珠つなぎに湧き出して来た。角鶏、跳鯊、貝殻、獠……。ただ、何かに遮られたかのように頭の中を回るばかりで口からは出てこなかった。

彼は立ちつくしていた。顔には嬉しそうな表情と寂しげな表情が入り交じり、口を動かすのだが声にはならなかった。やがて、彼はかしまり、はっきりとこう言った。

「旦那様！」

わたしは身震いしたようだった。わたしたちの間が悲しむべき厚い壁で隔てられてしまったことを、わたしは悟った。言葉が出なかった。

彼は振り返って「水生、旦那様スインに挨拶しなさい」と言うと、背後に隠れていた子どもを引き出した。痩せて、首に銀の輪はつけていなかったが、この子は二十年前の閩土そっくりだった。「五番目の子になります。世間を知らないもので隠れてばかりいます……」

母と宏児が降りて来た。声を聞きつけたようだった。

「奥様、早くにお手紙を頂戴いたしましたして、本当に嬉しくてたまりませんでした。旦那様がお帰りになるなんて……」閨土が言った。

「あら、何をそんなに他人行儀にしているの。兄弟みたいに呼び合っていたのに。昔みたいに迅くんで良いじゃないの」母は嬉しそうに言った。

「そんな、奥様めつそうもない。あのころは子どもで何も分かっていませんでしたから……」閨土はそう言いながら、また水生に挨拶をさせようとしたが、水生は恥ずかしがって彼の背中に張り付いてしまった。

「その子が五番目の水生かい。知らない人ばかりだから、恥ずかしくても仕方ないね。宏児と一緒に出かけられていいで」母が言った。

宏児はこれを聞くなり水生を誘い、水生も嬉しそうに一緒になって

出て行った。母は閨土に座るように言った。彼はためらったが結局座り、長煙管を卓に立てかけると、紙包みを寄越して言った。

「冬なので何もございませんが、この青豆はうちで干したものです。召し上がってください……」

わたしは暮らし向きを尋ねたが、彼は首を振るばかりだった。

「たいそう厳しいです。六番目の子も手伝いができますが、どうにも食べていきません……物騒で……あちこちで金を取られますし、決まりも何もありません……作柄も悪いです。作った物を売りに出すと何度モ金を取られて元を割ってしまいます。売らないと悪くなるばかりですし……」

彼は首を振るばかりだ。顔にはたくさんのしわが刻まれていたが、それは微動だにせず、まるで石像のようだった。つらいだろうに、それを表に出すこともできず、彼はしばらく黙り込むと、煙管を取って黙々と煙草を喫んだ。

母が尋ねたところ、彼は家のことで忙しく、明日には帰らねばならない、と言う。昼飯も食べていないと言つので、台所で何か食べるように言った。

閩土が出て行くと、母とわたしは彼の暮らし向きにため息をついた。子だくさん、凶作、重税、兵隊、匪賊、役人や地主が彼を苦しめ、木偶のようにしてしまったのだ。母はわたしに、持って行く必要がない物は全部彼にやればいい、自分で選ばせてやったらいい、と言つた。

午後、彼は長卓を二卓、椅子四脚、香炉と燭台、棹ばかりなどを選び出した。彼はあるだけのわら灰（郷里では煮炊きに稲わらを使っていて、その灰は砂地の肥料にすることができた）も所望したので、わたしたちが出発する際に、彼が船で運んで行くことにした。

夜、わたしたちは少し話をしたが、とりとめのないことばかりだった。次の日の朝、彼は水生を連れて帰って行った。

また九日が過ぎ、出発の日が来た。閩土は早朝にやって来たが、水生は連れていず、五歳の娘に船の番をさせていた。わたしたちは終日忙しく、話をする時間はなかった。来客も少なくなかった。見送りの者があり、物を引き取る者があり、見送りついでに物を引き取る者もあつた。夕刻、わたしたちが上船するころには、古屋敷のがらくたたちはきれいさっぱり片付いていた。

わたしたちの船は進む。兩岸の緑の山々は黄昏の中で深いまゆみどり黛色に染まり、次々と後方に流れて行った。

宏児とわたしは船窓に寄りかかり、はっきりとしない外の風景を一緒に眺めていた。宏児が不意に尋ねてきた。

「おじさん、ぼくたちはいつ帰って来るの？」

「帰って来る？ 行ってもいないのにもう帰りたいのかい」

「だって、水生が家に遊びにおいでって……」 黒い目を見開いて、

宏児は思いを馳せている。

わたしも母もなんだかつらい気持ちになり、また閩土のことを話した。母の話では、あの豆腐小町の楊二嫂は、うちが荷物の始末を始めから、毎日必ずやって来て、おとといは彼女が灰の中から十余りの碗や皿を掘り出したと言う。考えを巡らせた結果、閩土が埋めたのだらうという話になった。灰を運び出す際に、一緒に持つて行くことができるからだ。楊二嫂は、この発見を自分の手柄だと胸を張り、犬じらし（郷里の養鶏の道具である。木の盤上に柵があつて、その中にえさを置く。にわとりは首を伸ばしてついでにむことができるが、犬にはそれができないのでじれるだけである）をつかむと飛ぶように走つて行つた。纏足<sup>てんそく</sup>で底が高い靴を履いているのに、驚くほど速く駆けたそつだ。

我が家が遠ざかつて行く。故郷の山河も徐々に遠ざかつて行くが、何ほどの未練も感じなかつた。ただ、四方を見えない壁に囲まれ、ひとり閉じこめられているようで息苦しかった。西瓜畑に立つ銀の首輪を付けた小さな英雄のイメージは、あんなに鮮明だったのに、今では

急にばやけてしまい、わたしはまた悲しくなった。

母と宏児は眠っている。

わたしは横になって、船底のさらさらという水音を聞き、自分が自分の道を進んでいることを知つた。わたしは思う。わたしと閩土はここまで離れてしまつたが、わたしたちの次の世も心は通わせている。宏児は水生を慕っているではないか。わたしの願いは、彼らがわたしのようにならず、人との間に隔たりを作らないことだ。だが、心を通わせていたがために、わたしのように苦しみにのたうちながら生きて欲しくもないし、閩土のように苦しみに麻痺して生きること、他の者のように苦しみに荒んで生きることもして欲しくない。彼らには、わたしたちがしたことのない新しい生活がなければならぬ。

そんな希望に思いが至つたところで、わたしは不意に怖くなつてきた。閩土が香炉と燭台を所望したとき、わたしはひそかに彼を笑つた。いつだつて偶像を崇拜して、片時も忘れないのだから、と。だが、わたしの希望とやらも、自らの手で作り出した偶像ではないだろうか。

閨士の希望はすぐそばにあり、わたしの希望は遙か彼方にあるというだけだ。

うつらうつらしていると、眼前に海辺の緑の砂地が広がった。上方の紺碧の空には金色の丸い月が掛かっている。わたしは思う。希望とは、もともとあるとも言えないし、ないとも言えないものなのだ。ちよつど地上の道のようなものである。地上にもともと道はなく、歩く人が増えれば、それが道になるのだ。

一九二二年一月